

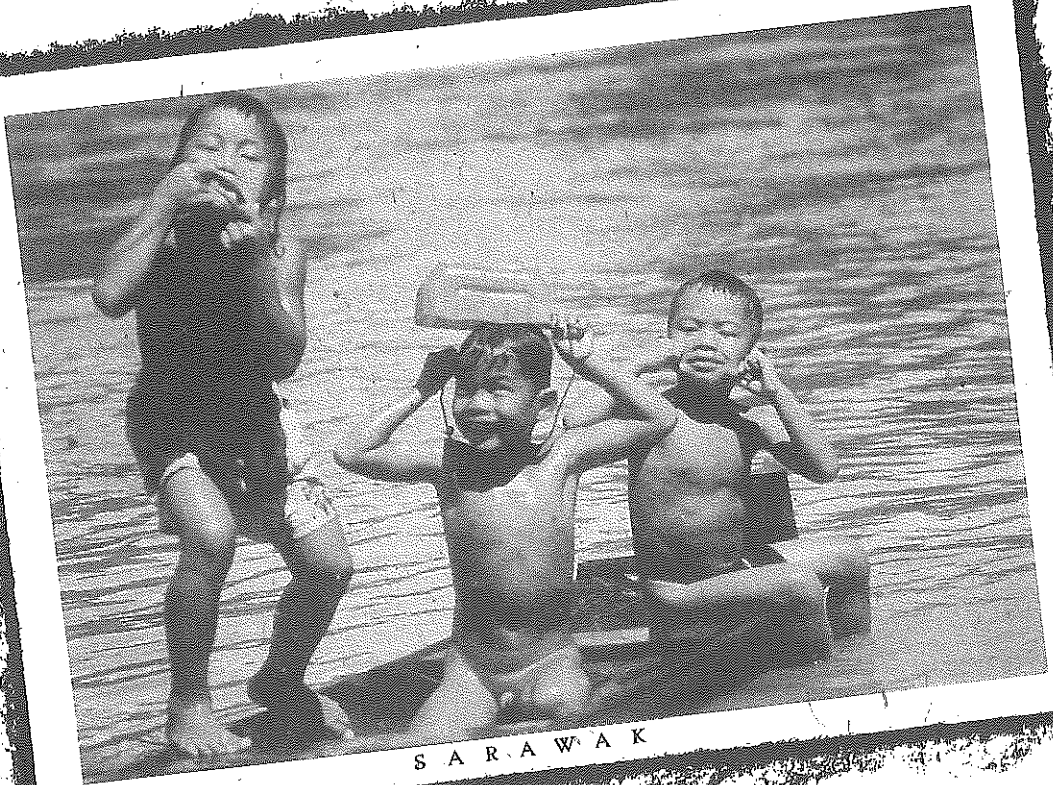
Save The Tropical Forests

# ア・ワ・フ・イ

森の通信

44

1997.6.17



SARAWAK

Hutan

1997.6.10

CONTENTS

- 3 ..... 自治体キャンペーン経過報告「3年ぶりの自治体へのアンケート」!
- 5 ..... 熱帯林保全のための全日市民会議 5/31~6/1 in 東京 報告
- 7 ..... 連載③ カナダの森林地帯と先住民の村をたずねて 黒田洋一 (JATAN)
- 11 ..... 熱帯林連続講座 part 4 報告  
① 熱帯材 ② シベリア材 ③ 国産材
- 14 ..... 山からの便り「熊野から」最終回・夏の編 中村義明
- 18 ..... つくり手からの家具のお話【その5】 永田健一
- 19 ..... ウータンへのお便りから



### 【ウータン活動報告】

- 97.3.9 関西熱帯木材使用削減委員会(以下削減委と略)が講演会  
講師/黒田洋一さん(JATAN事務局長),松谷治(天竜ウッドワーク技術顧問)さん  
北山康子さん(国産材住宅推進協会代表),浦本三穂子さん(SCC事務局長)
- 3.14 削減委など主催、ウータン等協賛「海はだれのもの・山はだれのもの」集会
- 3.24 削減委・全体会
- 3.29 ウータン「熱帯林連続講座Part4 熱帯材編」～サラワク・バプア  
講師/林達雄さん(元JVC事務局長),荒木琢磨(ウータン)
- 4.1 ウータン43号発送
- 4.19 ウータン「熱帯林連続講座Part4 針葉樹編」～ロシアの原生林  
講師/野口栄一郎さん(地球の友)
- 4.20 地球環境ネットワーク関西「アースデー集会」にて、ウータンの活動を報告
- 4.22 アースデーにウータンが、大阪府下全自治体に「熱帯木材使用削減、環境基本計画等についてのアンケート」発送
- 4.23 ウータン、同アンケート発送につき記者会見
- 4.25 削減委、全国100社と関西70社のゼネコン等にアンケート発送  
削減委・自治体部会、全体会議
- 4.28 削減委、同アンケート発送につき記者会見
- 5.11 削減委・家具部会
- 5.17 ウータン「熱帯林連続講座Part4 国産材編」講師/三澤文子さん(建築設計)ほか

## SARAWAK



◆川は、水浴び、洗濯、井戸端会議の場でもあり、子どもの格好の遊び場だ。飛び込む、泳ぐ、潜る。川遊びを止める親はいない。

[photo & ward] 峠 隆一 [環境ライター]

できた! SARAWAK  
今号からの表紙の写真がPOST CARDになりました。  
[カラワ7枚セットで500円]です。プレゼントにどうぞ! 申し込みはウータンまで。送料は別途です。





3年ぶりに『熱帯林保全のための全国会議』が開かれた。ウータンからは、井下、荒木と私の3名が参加。京都からも3名で、東京の総評会館に集った人間は50名を越えた。

久しぶりで集ったことでもあり、参加者はガラリと変わり、『A SEED』の若者達やサラフク・キャンペーン委員会のメンバーが集い、それに対して地方からの参加者が少し少なくなかった。

## 「これまでの自治体キャンペーンを振り返って」より

最初に主催のサラフク・キャンペーン委員会(以下SCCと略)の浦本三穂子事務局長が、「これまでの経過と課題」～東京都を例にして話された。

「1990年より自治体キャンペーンを始め、現在、全国の約170自治体が熱帯材使用削減を進めた。東京都の場合、92年に5年以内に70%の使用削減という目標を掲げた。しかし、絶対量が大幅減とも言い難い。建築物の増加が要因である。また熱帯材合板から針葉樹・複合合板にほとんど変わっていることも問題である。」

「自治体キャンペーンは、熱帯林保全に絶対な効果とは言えなくても、やるとやらないのでは大きな違い。キャンペーンの広がりには基礎体力となる。今後に残された課題も多い。」と。

次いで、JATAN名古屋の平井さんは、名古屋地域での取り組みを報告。3番目に神奈川のMOKの正木さんが神奈川県下の取り組みを報告。続いて、『A SEED』の若者から『熱帯木材使用削減委員会』の南さんからの報告。

南さんは、『関西熱帯木材使用削減委員会』で行った関西264自治体へのアンケートの結果と、全国アンケート(都道府県、県庁所在地都市、政令指定都市)の結果と、これらの評価を話した。まだまだ都道府県が県下等自治体の状況を把握していないのが問題だ。

### ◆これからの課題◆(SCCの提起)

- ・民間への波及
- ・コンパネ以外、建設以外の分野への波及
- ・欧米の動向の情報收拾と評価(特に木材認証制度等)
- ・国際熱帯木材機関(ITTO)の決議
- ・日本の大量消費のしくみ
- ・自治体との、いきの長い対話
- ・自治体の資料を有効に使う
- ・自治体への申し入れ等の回数を増やす
- ・マスコミへのはたらきかけの強化
- ・代替案の積極的提案
- ・森林組合等の関連団体との連携
- ・業界、自治体に関する情報/建材に関する情報の收拾と分析

### ウータンからの参加者の感想

- ・全国で活動している仲間と出会えたのが一番の収穫だったと思います。(荒木)
- ・自治体キャンペーンは皆、同じような問題を抱えているようだった。A SEEDの若い人と話ができてよかった。(井下)

## セッション2「国産材利用の現場から

問題提起者は、熊本県連で現在、野尻林業の野尻碧さん。そして、『木交会』の建築士・吉野さ

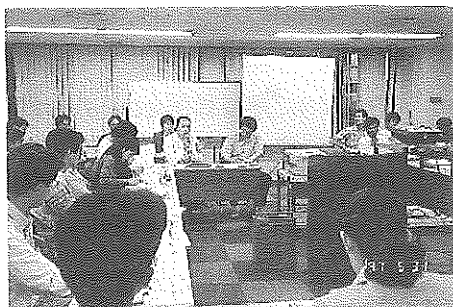
ん、『にっぽんこどものジャングル』大武さん、M&K間伐ボードの阿部さん。

野尻さんは、「国産材は理解して使ってほしい。国産材の合板の取組みも行うが、量や寸法に問題がある。ム7板使用もいいではないか」と。

吉野さんは、「野地板には間伐材利用をしている。人工林も見直し、大工も育てねば」と提案。

大武さんは、「国産材学校家具について、先生はただの備品と扱っている。環境教材として見直してほしい」と。

阿部さんは、「M&Kセラミック粉混入木繊維セメント板は、国産間伐材の木繊維と国産セオライトを使い、燃やしても有毒ガスを出さない。健康・安全な建材であるべきだ」と話された。



▲ 東京会場での全体会議 5/31

### セッション3「今後のキャンペーン」～シボルの建物・総量削減・環境基本計画等

「ペアアソシエートの森を守る会」の辻垣さんから聖イグナチオ教会の大幅な熱帯材削減の建設例と、住宅金融公庫の補助の問題の提起があった。

私、西岡は、この4月に大阪府下全自治体への「熱帯材使用削減・環境基本計画等」についてのアンケート中間報告を行った。5月31日現在の回答は、45自治体のうち26自治体。この26自治体のうち、使用量把握が1自

治体(42.3%)。また全型枠使用削減必要と答えた自治体は21もあったが、実施又は検討と回答したのは僅か3自治体しかない。一方、環境基本計画を実施又は進行中の自治体は12(46%)もあった。使用量把握や削減目標が無いままの環境基本計画ならば、今後の計画が形骸化する恐れがある。総量削減への各自治体の取組みが望まれる。

#### 熱帯林保護

— 現在までの構図 —  
 最大輸入国・日本とその乱用  
 削減 ← 自治体キャンペーン  
 ↓  
 型枠+家具



▲ 翌5/1でも活発な意見が出る。

- 今後の方向の検討 — 司会/林昭男さんまとめ (滋賀県旭大教授、建築家)
- ・ 輸入量の削減
  - ・ 国産材による自給率を高める
  - ・ 間伐材等の多様な代替法を提示していく
  - ・ 自治体に総量削減を要求する取組みをしていく
  - ・ 総量削減について、各グループが各地域で実践していく
  - ・ 各地の成功モデルのPR
  - ・ 針葉樹への転換の問題を明らかにする
  - ・ 長持ちのする建築物や家具
  - ・ 地元の森を考え守る
  - ・ 環境基本計画の動向調査
  - ・ 共働できるグループとの連携(健康住宅等)
  - ・ 人口問題等、時代のトピックに合わせた運動を行なう
  - ・ マスコミを通じた広報
  - ・ 土木、建築教育に環境問題を加える
  - ・ 子どもたちにどう伝えるか

## カナダの森林地帯と先住民の村を訪ねて

◆ 黒田洋一（熱帯林行動ネットワーク事務局長）

《ベラクーラのヌホークの村で》

翌日、再びボートの旅。原生林に覆われた島々を左右に見ながら、ミッドコーストの港町、ベラクーラに向かう。

本土の沿岸に近づくにつれ、伐採地が見えてくる。道路がないので、船で重機を運び、岸から伐採道路を建設する点はサラワクなどで見慣れた風景だ。人影はもっと少ないのがアジアとカナダの違いか。きりたった崖には古いインディアンの絵が見られる。考古学的研究も盛んだ。

丸一日の船旅を終え、沿岸の細い水道を延々と上って、暗くなってからベラクーラにようやく上陸。船をトレーラーに上げるのに一苦労。これを一人で行ってきた小柄なウエインのパワーに脱帽した。

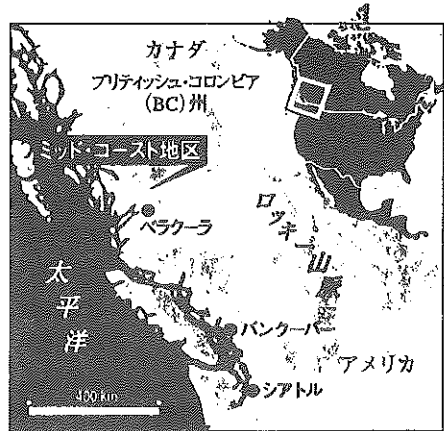
この町にあるFAN（森林行動ネットワーク）というバンクーバーの団体の事務所を訪れた。旧知のグレッグと再開し、ヌホーク・ネーションの人々のポトラッチが3日間あるので、すぐに帰らず、しばらく滞在するよう誘われる。ここでウエインと別れ、ポトラッチに参加することにした。ハイダ民族のように儀式に部外者の参加を認めないケースも多く、ラッキーだった。

原生林と切り立った海岸線と山々に囲まれたこの地域で、森林伐採に反対するチーフや住民の人々が昨年数十名逮捕されました。

ポトラッチにはこれらのチーフを支援する多くの活動家、ボランティアが全カナダからばかりか、アメリカや欧州からも参加しました。NGO関係者、近隣のハイダ、クリーなどの民族の人々と交流することができました。

FANの事務所には、木材産業の伐採計画などを詳細に記載した大きな地図が何枚も張り出され、母屋には多くのボランティアの若者たちが寝泊まりしていました。

この先住民の村の大きなホールで開催されたポトラッチは、昨年亡くなった再長老のチーフのローレンス夫人など3つのクラン（一



族)のチーフの亡くなった関係者のみならず、昨年山の事故で亡くなったボランティアの白人の若者もポトラッチを偲ぶものでした。このような儀式は、前世紀に教会や政府により禁止され、近年復活したものです。しかし、シャーマンやメディスン・マンは多くの場合、専門知識の回復が困難です。

一日目はスノー・クランと呼ばれる一族のポトラッチが夕方5時頃から始まり、儀式や挨拶のあと夕食会があり、さらに歌やダンスが明け方まで繰り広げられ、最後は参加者に数々の品物がギビングとして配られ、終了します。近來ない大きなポトラッチであるためか、バンクーバー島の先住民、ハイダ民族代表、スコーミッシュ（南部沿岸の先住民）、内陸部やサスカチュワン州、アルバータ州のクリー民族など、多くの先住民関係者が集まってきました。

2日目のローレンス一族のポトラッチでも参加した様々なファーストネーションのダンス、歌などが延々と続き、息子さんへのチーフの引き継ぎの儀式、それを祝う踊りなどがありました。3日目には、伝統的な「スピリット・ダンス」が披露されました。

3日間司会をしていた先住民文化の研究者であり、コーディネーターであるカレンさんの解説を交えて、カラス、人などの仮面をつけた演者が大きな部屋の周囲につくられた回

廊のような舞台上踊り、彼等の神話に基づいたストーリーを見ることで、人々が彼等の祖先からの文化のつながりを回復しようとしていました。中には秋田の「なまはげ」に似たようなコミカルなものもあり、日本の東北などに見られる古い文化との共通性も感じました。

私の隣に座っていたアメリカから参加した先住民文化を研究している女性は、強い感受性の持ち主でこのスピリット・ダンスに憑かれたように体が反応して、びっくりしました。

三日三晩のポトラッチにはさすがに疲れました。大がかりなイベントを成功させた村の人々の明るい表情とは裏腹に、他の先住民のコミュニティ同様この村では政府の福祉政策への依存、失業、犯罪、麻薬やアルコールなど深刻な問題を抱えています。例えばプリンセス・ロイヤル島でベトナム人移民の蟹漁の漁船が操業しており、彼等はアジアから来る麻薬を沿岸の先住民村などに売って富を蓄え、漁船を購入したというわさもされました。

長い間、伝統文化が抑圧され、言語や伝統文化を失ったわかい人々にそれを伝え、復興しようという先住民出身の文化の研究者や先住民出身の弁護士、森林伐採に反対するチーフらを支える住民やNGOの人々の活動には頭が下がる思いでした。

3日間のイベントをリードしてきたのは、ヌホーク出身の先住民文化研究者でコーディネーターであるカレンさんです。彼女自身、夫を失い、娘も麻薬に侵されるなど悲劇的な問題を抱え、最後に涙を流して「このような問題と闘うために、村がクランを越えて連帯して状況を変えていこう」と呼かけていました。後から読んだ資料によれば、前世紀にキリスト教の布教や白人政府の介入などの過程で、ポトラッチやシャーマン(メディソン・マン)が廃止され、これらの文化や言語の再建は本当に大変なことであると感じました。



△ 大規模なクリアカット(皆伐)でハゲ山になった  
/BC州クラクワット・サウンド

### 《野生生物と森林保護の争点》

ウエインらの話では、BC(プリティッシュ・コロンビア)州は野生生物保護ではカナダで一番進んでいるようでしたが、(ということは他の州はよほどひどいということか)州政府自身は特別には何もやってないに等しい、と言うのが多くのNGO関係者の意見でした。現在、同州の一部に熊の保護区が設定(クリスマティーン国立公園等)されているのは、ひとえに環境保護団体や世論の圧力のためで、ハンティングの規制に関しても同様であると言います。

この島を中心とする地域で伐採活動が止まっているのは、10年ほど前からで、ウエインらが保護区のキャンペーンやロビー活動を行ってきたことの成果でもあるようです。しかしまだ、保護区化は実現されていません。彼等はクーテニー地域で、もう一つ大きな白いグリズリーが息息する地域の保護区化を進めており、この3分の2は実現しそうであるとのことでした。

現在、BC州ではベア・ウォッチやWCWCなどの団体が、熊狩猟を全面禁止するような住民投票の実現をめざす署名運動をしていました。これは大きな注目を集めているようです。鮭の保護問題もそうなのですが、結局問題は例えば現在行われている森林伐採などの産業界の活動をどこまで規制できるか、ということであり、この点では大変厳しい現実があります。



BC州のEnvironmental Mining Councilという団体を訪問するために、ビクトリアに出かけたとき、たまたま州政府主催の森林管理に関する会議が開かれていたので、一日だけのぞいてみました。そこでもある生物学者が新伐採コードの「生物多様性の保護」に関するガイドラインの実現は、すでに多くの重要な森林が伐採会社の支配下にあり、州政府は森林、土地利用を根本的に見直す作業を行わないので、実現困難であると訴えていました。

全体の年間許容伐採量が一向に削減されず、バンクーバー島などでそれが保護運動で削減されると他地域では増やされる状態にあり、確かにここ10年間で保護区は以前と比較して14%ほど増えたものの、結局森林地域の90%以上が伐採されるため、重要な森林や野生生物の生息地はわずかしか残らないことが多くの人々の憂慮の対象になっています。

(同州政府は現在すでに9%以上が保護区となり、近い将来12%の保護区化を達成するとしています。実際には森林の無い岩石と雪に覆われた山岳地域が多く、高度の低い森林の部分はまだ6%ほどだと環境NGOはみている。)

表面的には州政府はコードの導入、新しい環境アセスメントの導入、住民参加による地域土地利用計画づくりなど進歩的な政策を進めているように見えます。しかし実際には多くの地域で政府や木材業界などが、これまでのやり方を変えないために、暗礁に乗り上げています。合意されたことも守られないなど、結局これらの新方式はスクラップになりそうです。

州政府はこれらの新しい試みを最大限に宣伝しているので、一般市民もあたかもそれらがうまく進行していると進んでいる人が多いようで、環境保護団体の多くは、政府のやり方にしてやられた、という思いがあるようです。クラクワットにしても実際に守られた森林はごく一部で、多くの重要な部分は伐採されてしまうのに、世論は鎮静化されてしまい、キャンペーンは失敗してしまったという評価もあるようです。またこれらの過程で、保護

区を少し増やすことで満足しない団体や活動家——例えばコリーンやハーブ・ハモンドら森林管理全体を根本的に見直すべきだという人々——は「過激派」扱われ、孤立させるようなやり方を政府が取ってきており、現状は多くの環境保護運動にとり、より厳しいものになってきている、という意見を多く聞きました。

コア・プロセスや包括的土地利用計画の実施は失敗に終わっているというのが、私の会った多くの活動家、学者の結論でした。すでに説明したように、このプロセスではごく一部の地域では若干の保護区の拡大に成功したものの、大半の地域では何も変わらなかったか、一層ひどくなった、というものです。そしてコア・プロセスはすでに挫折しています。コードについても環境保護団体、木材業界双方から、実施が困難という意見が多く出されています(双方逆の理由で)。ただし、最近来日したマキニスさんやグレイ・ジョーンズさんは、現在大幅に伐採量削減が進行し、クラクワットでも先住民などのクレームで伐採が止まっていると言い、事態はどんどん動いているので、正確な評価はもう少し時間が立たないとわからないかも知れません。

#### 《BC州の森林問題の将来》

先に述べましたが、それでも過去に比較すればBC州では過去15年くらい間に、環境保護団体の力、世論が他の州より相対的に強くなったため、徐々に進歩の跡が見られるのは確かだと思います。しかしながら、ではどれだけの地域が開発から逃げられるか、という点では悲観的な見方が多いというのが実感です。

BC州の林業の実態は、いわば日本の1950年代～60年代、木材需要にあわせて「保続伐採量」を決定してきた林野庁のやり方に似ています。日本で起こったような「フォールダウン」的な破局が近未来に起こると、多くの識者が指摘しているところ。また、BC州でさえ、二次林や植林地の多くは氷河期以降に発達した薄い土壌と、気象条件の悪

さなどのため、根も浅く、成長も大変遅く、将来資源としての期待はできないこと（一部の条件の比較的良い南西部を除いて）。そのような枯渇する資源状況の中で、同州の木材産業はアルバータ、ユーコン、サスカチュワンなどに進出しており、周辺の州の森林伐採が急激に進んでいます。

新たに導入された連邦及び州の環境アセスメントに関しても、ハックルベリー銅山の例を見ても、三菱の意向を受けた駐日カナダ大使が州政府や連邦政府に圧力をかけて、地元住民や関係NGOらの意見もろくに検討せず、すばやく認可を急いでもったように、実施する政治的意志が欠如しているのが現状です。

(つづく)

['97.4.7 毎日]

## 夢を追う

### 熱帯林保護訴え続け…

世界の熱帯林を破壊してきた元凶と言われる日本。この10年間、世界各地の熱帯林の現状を見てきた熱帯林保護ネットワーク事務局長、黒田洋一さん(43)は、「日本が年間80兆円もの建設土木投資を続けているのは、破壊は止まらない。生活の在り方を見直し、経済をベースダウンしなければ根本的な解決はできない」と訴える。

黒田さんが熱帯林の問題にかかわるようになったのは、1985年11月にマレーシアで開かれたアジア青年消費者リーダー会議に参加後、インドネシア、フィリピン、タイなどを回って以来。熱帯林が破壊され、日本の経済植民地的な存在になっている現状にショックを受けた。翌年にはマレーシア・ペナン島で開かれた熱帯林保護に関する国際会議で、東南アジアのNGOから「日本は世界一の熱帯木材の消費国なのだから、保護のために協力してほしい」との要請があったことから、87年、日本のNGO「地球の友」などと協力、同ネットワークを発足させた。

黒田さんは、東京都世田谷区で育ったが、小学校時代はまだ原っぱや小川など泥まみれになって遊ぶ場所があった。しかし、東京オリンピックのころからの開発ブームで、こうした自然が次々に消されていく姿に疑問を感じ、環境問題に興味を持つようになった。そして「自然を壊さない生き方をしたい」と、大学の農学部で農業経済学を学んだ。しかし、授業に飽き足らず、大学を中退、市民運動にかかわるようになった。

同ネットワークがまず取り組ん



カナダで原生林調査をする黒田さん

だのは、熱帯木材貿易についての日本の役割に関する報告書の出版で、世界自然保護基金(WWF)の協力で「熱帯林破壊と日本の木材貿易」を出した。その後、チリ、ブラジル、カナダで温帯雨林地域などの調査を実施、日本の木材・森林資源利用・輸入問題の全体像をつかんだ。そして国際会議や国内のシンポジウムなどを通じて日本の輸入木材の利用状況などを明らかにするとともに、世界の原生林保護の重要性を訴えた。

しかし、現実には、簡単に現状は変わらない。「これまでの価値観を転換しないと根本的な解決につながらない」と思うようになった。そのためには、会社で働く時間を短くして経済成長中心主義をやめ、家族や自然と触れ合う時間を増やすなどの意識改革が必要という。「物をそんなに消費しなくても済む生き方もあるはず」という指摘は浪費型社会に慣れ切った現代人には耳が痛い。

【川鍋 亮】

# 17 熱帯林連続講座 PART 4

■ その①熱帯材問題編

3月29日(土) 16:00~17:00 大阪

今年のウータン連続講座は、熱帯の森だけでなく世界の森にも目を向けようということで、熱帯材問題・亜寒帯材問題・国産材問題についてそれぞれ1回づつ講座を持つことになりました。

その1回目は日本国際ボランティアセンター（以下 JVC）の元事務局長をしておられた林達雄さんから、昨年訪れたマレーシア・サラワク州の現状を報告してもらいました。

林さんは医師の資格を持っておられ、'90年に保健・衛生問題の専門家として日弁連の合同調査団に加わりサラワクに入っておられます。今回は6年ぶりの訪問で、かつてと比べて様子がとても変わったと言っておられました。

その変化の一つは「気候」です。林さんは「サラワクってこんなに暑苦しいところだったっけ?。」という質問をしたくなるくらい今回暑いと感じられたようです。お年寄りにきいてみると「昔はもっと涼しく作業をすることができた。それは森があり、そこから涼しい風が吹いてきたからだ。」と答えてくれたということでした。

またもう一つの変化は「教育の浸透」です。狩猟・採集をして暮らしてきたプナン人に定住政策が適用され、「若者が油椰子プランテーション等の会社に働きに出る。」「都市の文化の影響を受ける。」「伝統的な暮らしに断絶が起こる。」といった事が進行しているそうです。林さんはこの事態を「自然と人間が長い時間共生してくることのできた知恵が失われ

てしまう」と受け止めておられます。

そして、これは良い変化なのですが、「プナン人に対する警察の態度が変わった」ことです。これは「プナン人の伐採道路封鎖に対する不当逮捕について」の裁判闘争において、勝訴したことが原因となっているようです。数多くの裁判闘争を少人数で担い、裁判資料を作って戦っていることのほんの少しの裏りなのだそうです。

最後に変わらないことを一つ紹介すると、「ロングハウス（サラワクの先住民が住む長大家屋）の過ごしやすさ、楽しさ」は世界一だということだそうです。40ヶ国を旅した林さんにとって、最も居心地が良いと感じさせるその理由は、個室と共有空間のバランスの良さ、特に夕暮れ時の団欒の時間の過ごし方の人間的な豊かさにあるようです。「老後はできたらサラワクで過ごせたら」と言っておられました。

林さんは最後に今後どうすればサラワクを傷つけないでおけるだろうというお話をされました。今までは「環境問題等でNGOが手を組めば変わるのではないか」と思ってやってきたが、むしろ「企業による自由貿易化の方に先を越され環境は二の次になってしまった」これからは「次世代である子供とそれを育てる若いお母さんや、先生へ伝えていくこと」「NGOの活動をもっとし易くする為に政治にも口を出す」といったことに焦点をあてていきたいと言っておられました。

(文責 荒木琢磨)

# '97 熱帯林連続講座 PART 4

## ■ その②亜寒帯材問題編

4月19日(土)PM6:00~7:00 大阪

二回目は4月19日に行われ、ロシア極東地域の森林伐採の状況を「地球の友・日本」の野口栄一郎さんから報告していただきました。

まず講座の始まる前に、NHKで放映されたシベリアの森林伐採についての番組のビデオが流されました。その内容は「森林伐採によって永久凍土が解け沼地が広がり、その沼地が乾いた後には地中の塩分が吹き出し植物の生えない不毛の土地が広がりつつある。その森林伐採には日本の木材輸入が関係している」というものでした。

そのすごい破壊の様子に会場内は息を飲んだのですが、実はこの内容はNHKが「日本へ来る木材の主な伐採地であるロシア極東南部と、そこからはるか北のヤクーツクで永久凍土が解けだす場面を無理矢理つなげてしまった」もので、事実とは異なることが野口さんから説明されました。

しかし永久凍土を解かす原因が日本の森林伐採になくとも、日本の北洋材供給地である沿海州、ハバロフスク地方、アムール州等のロシア極東地域での伐採は、原生林を集中的に切りその生態系を根こそぎにするものになっているということで、持続可能な森林経営、生物学的多様性の保護の観点から見ても日本の森林破壊の影響は多大なものがあるようでした。

日本への北洋材輸入は、1919年(大正8年)にはじまり、太平洋戦争後の'50年に再開してから'70年の900万立方メートルをピークに、'92年の450万立方メートルまでおちこみ、現在は500万立方メートル強で再び増

加傾向を示しているそうです。

'91年のソ連崩壊によってルーブルの価値が下がり、燃料費の高騰や中央アジア諸国の財政難による木材需要の減退からロシア極東地域の木材の国内移出がなくなる一方、外貨獲得の為に最も有力な市場としてロシアの木材業界の対日輸出意欲は高まっており、これを受け入れる日本側も全国北洋材協同組合連合会(全北連)が「ロシア極東地区の一年当たりの針葉樹成長量が1億6,500万立方メートルにに対し、我が国の輸入量はその3~4%にしか過ぎず、事実上半恒久的にその資源を活用できる」旨のレポートを出しているように、シベリアの森林資源をもっと消費していこうという傾向が顕著なようです。

どうやって「世界中で拡大する森林への、(特に私達日本に暮らす者による)破壊の圧力を減らしていくか」という立場に立った場合、この地域で進む森林生態系の破壊・生物学的多用途性の消失・先住民の生活への影響等を想像し、こうした事態に憂慮の念を表して、知識を積み重ねていくことはとても大切な事だ、と感じました。

興味をお持ちの方の為に、最後に野口さんがご紹介下さった、参考図書をあげておきます。

◎「どんぐりの雨」

北海道大学図書刊行会

◎「シベリアー消えゆく緑の宝庫ー」

日本環境保護国際交流会(JEE)

連絡先(075-751-5404)

# 17 熱帯林連続講座 PART 4

■「国内材問題編」—国産材の活用を!

5月17日(土)PM6:30~アビオ大阪

熱帯材、シベリア材向題を考えた今回の講座は国産材をしめくります。

いうまでもなく外材におされつつける国産材と林業はその大半が今だに活路を見い出せずにいます。

そんな中で在来軸組工法で国産材で木の家づくりを強かに進められている建築家の三澤文子さんと「大阪にも森があり林業があるんやぞ!」とアピールをこめて河内長野森林組合の太宅吉彦さんを迎えて国産材について話をいただきました。

三澤さんは'95年の震災直後、仲向の建築家グループとともに現地に入り住宅倒壊家屋の被害調査を行ない、その結果から今後丈夫で長持ちする木造住宅を建てるにはどうすればいいか。と各方向に訴え、又、関西近郊の林産地との産直ネットワークもつくってこれていきます。

まず三澤さんは国産杉を使うきっかけとなった徳島木頭村で林業を営み和田さんとの出会いから、スライドを見ながら木頭の林業を話された。

和田さんたちは15年前に「葉枯らし」という昔ながらの自然乾燥を復活させていた。現在、「葉枯らし」は木の水分をめぐくことで材を軽くすることももちろん、材の色、艶つやも良くなることで木の付加価値をつけることで見直されている。

杉は切り株の上で山側に倒され葉をつけたまま2~3ヶ月山に置く。切った杉は当初含水率200%から70~80%になる。その後搬出、製材し「さんづみ」で1~2ヶ月天然乾燥すると含水率は30%ぐらいになっている。ここでやっと大工さんの手に瘦り加工が行なわれるが家が立ち上がるころには20%ぐらいになっているという。しかしこれは木頭村に限ってのことであり他の場所

では「まだまだ」ホトホトの材が出されていることの方が多いのが現情である。

木造住宅にとって木の乾燥がいかに大事であるが建築の中から徳島の例を説明してもらいました。三澤さんの木の家づくりはウータン軒上に何度も紹介しているのが執面の都合上割愛させていただきまが、和田さんらは'95年にTSウッドハウス協同組合を林業家5人でつくり現代的な建築家や木を見る目をもった大工さんたちとのネットワークをいかし産直ネットワークを押し進められている。

太宅吉彦さんは30代と若く林業の現場で働いておられる方で、現任、20代の青年数名とともに山に入る毎日ということであらう。

高齢にせよ山は重の現場に20~30代はめづらしくびっくりしたものです。

河内長野の森林面積は7700ha、そのほとんどが民有林です。人工林は5500ha、植種は杉50%、杉と松40%、雑木10%ということである。山主は多く、1家当り平均10~20haしかもていなく、現在専業林家は10人。

昔から河内長野の材は吉野へ置かれ吉野材と同じく酒樽用として使われてきた。植林も密植で75~80年生が中心である。この他、林業のPRのために機械化、大型集積機の導入などを行なっている。

ハウスメーカーに大量に使われる合板造作材に使われるシベリア材、構造材としての米材におされる国産材ははたしてたかあかえるのでしょうか?

その1つのところみか各地に出来つつある産直ネットワークです。

まだまだ小さく少ない力ですがこれらが全国でネットワークをつくっていくことが大事だと改めて感じた会でした。④

# 『初夏の編』

一山からの便り

まの  
熊野がら

◆ 中村 義明  
Yoshiaki Nakamura

## △紅葉よりもさらに美しい緑の季節△

5月に入り、熊野の山々も新緑真っ盛りである。照葉樹林の多い熊野では、紅葉の時期よりも、むしろ新緑の時期の方が山々は美しい装いを見せる。

多様に微妙に異なる緑色の海の中に、至る所で椎の花が白く、あるいは金色に輝いている。所々に藤の花の紫が連なっている。つつじやうつぎなど、様々な花が彩りを添えている。もうすぐ、朴が大きな白い花を咲かせるだろう。

鳥たちも巣作りに忙しい。

ある日、土場で弁当を食べていると、シジュウカラが置いてあった軍手の綿毛を一生懸命むしっている。和田さんと私がすぐ近くにいるのに、怖がるようでもない。しばらくむしると、飛んでいった。

「巣作りに使うんやなあ。それにしても、人なつこいもんやなあ」と二人で話し合う。

昨年の8月から始まった伐出もようやく終わり、架線も撤収した。今年の益明けから引き続き隣の山を伐出するので、土場はそのまま残しておく。安全第一で仕事をし、皆が仕事が切れることがないようにとの和田さんの配慮で一つの山で8ヵ月働かせて頂いた。

伐出は命懸けの危険な仕事である。なにはともあれ皆無事に働くことができてよかった。山の神さま、ありがとうございました。



ろが今回の伐出のあと。篠尾の山、まん中のハゲたところ

## △茶摘みと田植え△

5月に入り、八十八夜の頃になると、ここ篠尾の里でも茶摘みの季節を迎える。篠尾は良い茶ができる所で、大抵の家では一年分の茶を自家製で賄う。たくさん作って売る人もある。無農薬で一番茶しか摘まない、結構贅沢なお茶である。

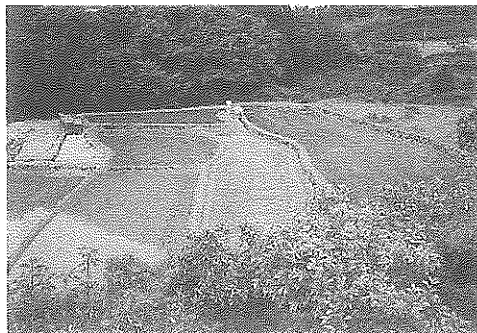
我が家でも仲曾のおばさんから分けてもらったり、頂くこともあったりで、おいしいお茶を楽しんでいる。

お茶作りの作業は、しかしなかなか重労働である。茶の芽は一斉に出てくるので、作業は一時になる。妻も、息子がいつもお世話になっている仲曾と森のおばさんの茶摘みのお手伝いをした。

田圃を作っている家では、お茶と田植えが相前後して、大変な時期である。



茶を植えている。山里では田の山岸(石垣)にも



我が家は今年で9回目の稲作りである。今までは想いが先行して気負っていたようだ。今年は田圃と稲に任せて、お手伝いをするような気持ちで気負わずにやってみようと思う。苗も大きくなりつつあり、6月に入れば田植えができるだろう。秋の実りに向かって楽しみだ。

△雑木を使い和蜜蜂飼いに△

熊野の山間部では、和蜜蜂を飼育する人が少なからずいる。山に自然という蜜蜂を、自分でこしらえた蜜うと（蜜樽とも言う）、つまり巣箱で飼うのだ。

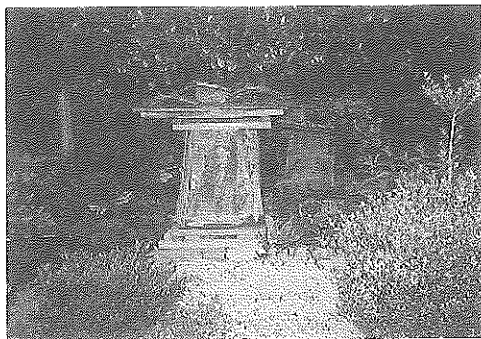
初夏の頃が巣分かれの時期である。頃合いの丸太の中をくり抜いて上と下を板で塞ぎ、蜂の出入りする小さな穴を作って、据える。どんな木でも良い訳ではない。梅やさるすべり、桜、杉などを使う。据える場所も、大いに重要である。日当



りよく西日の当たらない岩の下や大きな木の下などが良いとされる。

篠尾の村でも何人かのおじさんが蜂を飼っている。和蜜蜂は、黒木や種々の木や草花の蜜を集める。全く自然の蜜である。濃くてうまい。心臓の薬になる。

我が家でも、毎年何本か分けてもらう。妻の母も少し心臓が悪いので、送ってあげている。私も丸太が手に入るので、蜜うとを作って据えようと思っている。篠尾にもまだ雑木の山があるので、大いに可能性がある。楽しみだ。



△熊野という風土の中で生まれた絵△

5月3日、私たちは熊野川町小口の、休校になって1年たった小口小学校へ出かけた。山へ2、3度手伝いに来てくれた曾我修君（37歳）の個展が講堂で開かれたのである。和田さんの手ほどきで2年前から油絵を始めた修君だが、2年間に30点ほど描きため、師匠よりお先に個展を開くことになったのである。

小口小学校をチョウザメの養殖場にしようという話があり、そうなると川が汚されるというので和田さんたちは反対している。小学校を有効に活用しようという一つのデモンストレーションでもある

訳だ。

技術的なことはさておき、修君の絵は自然や人への想いが飾らず素直に感じられ、熊野という風土の中で生まれた絵だと思う。中でも「最後の運動会」と題された絵は、彼も通い卒業した母校への哀惜の年が切々と伝わってくる秀作であった。



◀ 玄関から山を眺める。

### △初夏の楽しみ△

わが家の玄関は戸がなく、校庭に向かって大きく開けている。

夕方、仕事を終えて風呂で汗を流すと、玄関で冷奴などを肴に一杯やりながら暮れなずむ熊野の山を眺めるのが初夏になったこの頃の楽しみである。心地よい風に吹かれながら、夕闇の中に次第に輪郭を失っていく山を飽くことなく眺めている。

### △痛みを分かち合い、自然と調和した

節度ある生き方をしたいと願う△

山村が過疎化して久しいが、ここ熊野でもどうやって振興するか、大きな課題を抱えている。

熊野は大阪、名古屋からも遠く（近畿のチベットと私は呼んでいる）工場を誘致する事など無理である。

熊野の山並みを見渡す篠尾の山で働きながら、和田さんと話し合ったことがある。熊野は美しい山と川が宝だ、だからこの美しい自然を活かして人びとの暮らしが成り立つのが一番だと。自然と調和した林業と農業、林産加工と農産加工。

自然と調和した形で、都会の人に自然体験、山村体験や休養をしてもらうこと。昔から熊野詣で人びとが求めた魂の癒しを現代の人びとにも体験できる、豊かな自然を回復したい。公共投資による土木工事は山村の人びとにも職と収入を与えてくれ、道路や林道など整備され便利になった。反面、工事によって川が荒廃し、魚も減った。

熊野の美しい自然を守るため「環境保全条例」の制定を求める請願活動が行われた。私も篠尾の全戸を回って署名を貰った。手を着けやすい「放置自転車条例」は4月から施行された。山や川を守る条例はこれからである。土木工事の際に山や川を破壊しないよう配慮することが必要だ。

新宮市に「熊野環境会議」があり、5月11日の朝日新聞に載った、佐野の浜埋め立ての反対や、那智勝浦町の山奥の産業廃棄物処分場計画への反対など、頑張っている。

私たちの贅沢な暮らしのツケを子孫に回すことはしたくない。現在の生活から贅肉を削ぎ落とす痛みを分かち合って自然と調和した節度ある生き方をしたい。地球上の生命は皆繋がっているのだから。人間の生活は政治経済社会でも贅沢と無



駄を積み重ねて行き詰まっている。市民オンブズパーソンの活躍を期待したい。今、一番人間に必要な事は、肥大化して止まらなくなっている物質的欲望に歯止めをかけ、節度ある暮らしと公正な社会を実現させることだろう。際限のない欲望の追求は病気を招き死に急ぐことになる。本当に大事なものは何か、つい忘れてしまう。

この間「地球交響曲」を見た。出演者が危機的状況にもかかわらず一様に明るいのに、安心させられ励まされる思いだった。

まだ間に合う。皆の心が変われば地球はどんどん良い方向へ進みはじめるだろう……とこんな固い事を考えながら玄関で一杯飲んでいる訳ではありません。ただただポケットと山を眺めて飲んでいるのです。

思いつくままに熊野での暮らしや山仕事のことなどを書いてきましたが、4回にわたってお付き合い頂きありがとうございました。

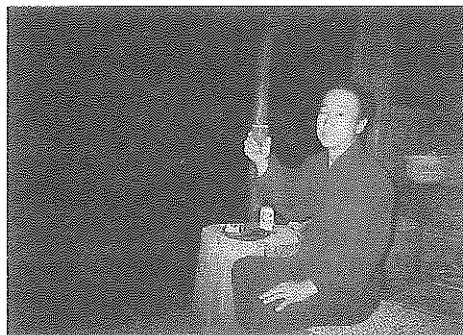
編集の皆さん、いつも原稿が遅くなりすみませんでした。

読者の皆さんからも何なりとお便りが頂けたら嬉しいです。

これから夏になると山仕事も暑さの中で大変です。特に下草刈りはえらい。でもその後には世界一うまいビールが味わえます。皆さんといつか一緒に働いて、うまいビールが飲めたら幸せです。

では熊野の山から、美しい地球交響曲に乾杯！

〔おわり〕



◀玄関で乾杯！

◆中村さん、1年にわたって山の暮らしを書いていただきありがとうございます。又、折を見てウータンに寄稿していただきます。おつかれさまでした。

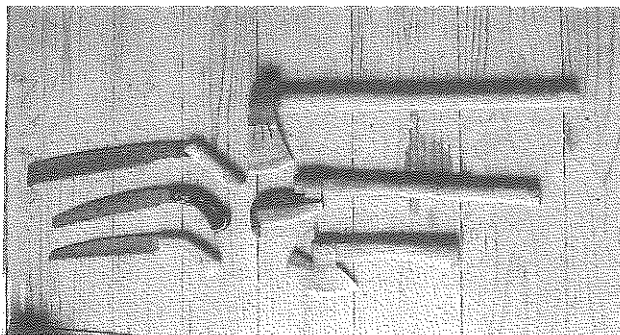
中村さんにお便りを出される時は下記にご住所を書いておきましたのでよろしく！

---

〒647-12 和歌山県東牟婁郡能野川町  
ふるまごかい 篠尾 162

中村 義明

---




# つくり手からの「家具」のお話



## ◎その5

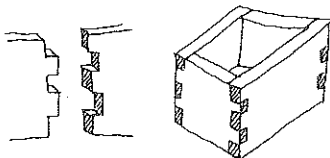
家具をつくるにもいろいろ工程があるが私は組立ての時がいっぱい好きです。形が出来てくる時本当にいい気持ちになる。板材を木取り(部材をとる)して、各部材の墨つけと加工、そのあと釘で仕上げ削りをしてやっと組立てにたどりつく。

寸法やほぞとほぞ穴の詰まりがうまくいってれば組立てはスムーズにいくが、そのいずれが少しでも違えばかがみかねじれとなって出てきてあとあとまでひびいてくるのです。

よく訓練校で言われたことですが、大工さんは1~2mmの世界だが本工は0.1~0.2mmをやらんとダメだと……。確認、のくり返しです。

さて、家具づくりには板づくりと框づくりとがあり、前者で図に書いたようなほぞとほぞ穴をつかうのが框づくりと言います。これに対して板づくりというのは文字通り板を組み合わせることを言います。

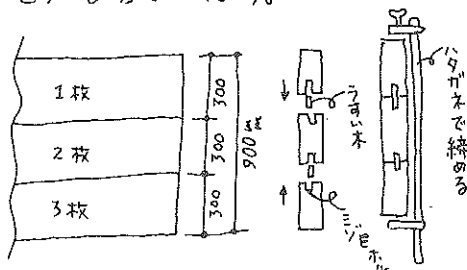
箱物に多い作り方です。



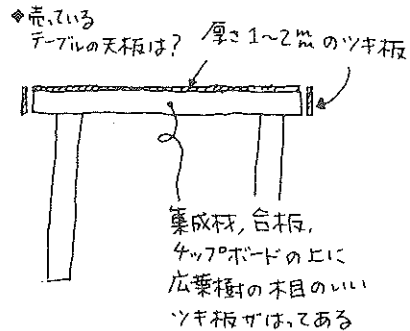
▲5枚組つぎ

板づくりの中をとうか広い板がいくつあるかが「ほぞ合わせ」です。

ダイニング、テーブルや学習机の天板をつくる時にやります。



## ◆永田 健一 [別注家具製作・ZOO]



1枚で大きな板があればいいことはいないのだが、材料がバカにならない(ムリからキリまであるが)。

天板だけでなく板づくりの家具をつくる時はよく使う。加工方法によってミゾを付けず「イモほぞ」(面と面だけでひっつけること)もよく使う。

組立てには必ず接着剤がいる。ボンドの飛躍的な普及は組立てにはかかせない。以前はニカワや米(はんつぶ)をつぶして接着していた。

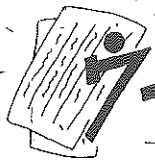
時々、職人さんに1日中米つぶをつぶしていた話を聞いたりする。

大変だったんや!

ニカワは指し物には今でもつかわれているが扱いがめんどりで又技術がいるのでたいていはボンドによって変わっている。しかしすぐれた一番の接着剤であることはまぎない。

私は今、どこにでも売っている木エボンド 夏冬兼用型のCH18をつかっていて、今度無公害というドイツのやつを使ってみようかと思っている。

本来、木と木のしまり具合だけでつくればボンドなどいらないのですが、技術がともなわない分やはりボンドが必要になってくるのはいたしかたなくしょうがないですね。



WATAN

# ワタナベのお便りから.....

(一部略・敬称略)

◇ 5/17の連続講座『国産材問題編』に参加しました。三澤さんが建てられた国産材の家や、山の仕事のスライドはとても説得力がありました。また、森林組合の大宅さんのお話はとても理論的で、しかも、初めての人にもわかりやすく、一度現場へ行ってみたいと思いました。そんな近くに(河内長野)に林業地があるなんてオドロキです。

◇ いつも『森の通信』興味深く読ませて頂いています。海外からの安い製品が入り、日本の山林、農地が荒れています。一次産業は高齢化を追い風に衰退し、風前の灯です。一方で有限の海外の熱帯林、寒帯林が荒れ大きな関心事になっています。このような状況に変化をもたらすものはわれわれ一般市民の消費生活、ライフスタイルの転換ということなのでしょうが、現実には困難です。ウータンのみなさん、くじけずに頑張ってください。わずかですがカンパさせていただきます。

◇ 会費大変遅くなり申しわけございません。井下様には大変興味深いお話を伺い有り難うございました。(後略)

◇ 寄付の意もこめて、適宜あつかってください。ご活躍を心から尊敬します。機関紙をいつもありがたく存じます。

◇ (前略)『パプアニューギニアの森』を今読ませて頂き、世界の現状を知るとともにショックも受けました。熱帯林の開発にODAが入り、日本がODAに援助金を多額にだしていると書いてあり、昨年私もODAに参加したく説明会を聞きに行ったので驚きました。国際ボランティアでは良いことばかりしていると思っていたのですが...。(中略)やはり私たち一人一人が、行動する上で、何のためか、効果は何かを追求していかなくてはならないと感じました。

◎ [会費・カンパをいただいた方] (敬称略) 97. 5. 12まで

ロニー・アレキサンダー 飯高輝 岡市志奈 樫本慈弘 春日美恵子  
木村久吉 倉友克美 清水靖子 下山久美子 住田好江 千代延明憲  
辻秀之 恒成和子 富崎正人 中島紘 松永敬子・伊東利一 深尾葉子  
福島在行 本田次男 宮沢千恵子 森みどり 山内智 山中浩一 山本紀子 由良行基周 横田憲一

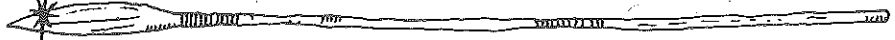
◎ [裏返し封筒をいただいた方] 京都YMCA・梶川さん

◎ 皆さん、ありがとうございました!

いろいろな団体にカンパしておられる方もおありで、大変だと思いますが、今年度の会費がまだの方、よろしく願いいたします。大切につかわせていただきます。

[会計・井下祥子]

# HUTAN ACTION SCHEDULE



メデタイ、メデタイ、ニガメデタイネン、テモメデタイネイ

## 7-7 HUTAN 10th 記念 PARTY!

結成10周年 パーティ

◆女性3人から始まったウータン、87年のことでした。アツという向の10年でした。時はたてど相変わらずピンポーン団体のウータンです。世の中見わたしてみてもロクデモナイことばかり、しかしめげないウータン、新たな気持ちでこの先もやりまっせ!のイキで6月28日にパアアツと、パーティやります。当日は音楽ありの、コーラスありの料理ありの7キアイアイのパーティにしようと思っておりますのでこの期会にどんな人同サやってるのかお知りになりたい方はいらっやって下さいませ!(但し、要連絡です。)

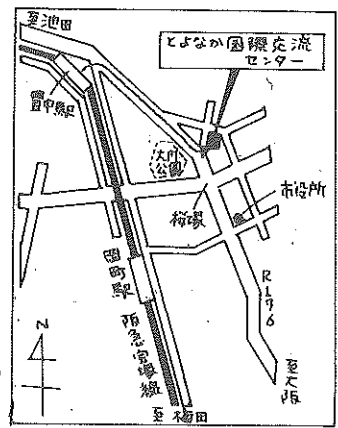
【時】 **6月28日(土)** 午後12時半～4時

【とこ】 とよなか国際交流センター  
(Tel.06-843-4343 豊中市北桜塚3-1-28)

【参加費】 無料ですが料理代カンパいだけたらありがたいです。  
持ち込み大歓迎!!

参加されたい方は下記までお知らせ下さい。

【お問い合わせ】 0722-52-0505 西岡(夜間)  
0720-81-4939 永田(夜間)まで



### ウータン・森と生活を考える会

【OFFICE】 〒530 大阪市北区中崎西1-6-36  
サクラビル新館308  
「関西市民連合」気付  
Tel.06-372-1561

【一部】300円 【年会費】3000円  
【郵便振替】00930-4-3880

- 購読希望の方は郵便振替で申し込み下さるか、又事務所までご連絡下さい。
- ウータン定例会は、毎月、第2、第4火曜日7:00pmより「関西市民連合」事務所にて行っております。